コラム「蜃気楼の国・満州」

2024 年 6 月 1 日

先日、満州にて 12 年間を過ごした方から、当時の出来事についてお聞きする機会がありました。

満州帝国は移民 500 万人構想として知られ、その生活や実情について詳しくお話しいただきました。

その方が 15 歳の夏、昭和 20 年 8 月 9 日に、ソ連が中立条約を破り、新京二中の校庭にいた際、突然戦闘機が現れ、友人が数メートル先で撃たれて亡くなったことを振り返りました。
その後、ソ連軍やハ路軍（中国共産党）の捕虜となり、日本に帰国できたのは終戦から 1 年半後だったそうです。

満州帝国にかける夢や期待の中で、ソ連軍によって亡くなった方々や、鉄道が封鎖されたため新京に到達できず餓死した方々、そして戦禍や疾病によって亡くなった幼い子供たちまで、多くの人々が犠牲になったことが語られました。そして、戦争を引き起こした愚かな軍人たちの責任にも触れ、ウクライナやパレスチナのような戦争が早期に終結することを願っていました。

満州帝国の夢の崩壊、戦争による犠牲の深刻さ、そして戦争の愚かさについて、再び深く感じさせられました。

当時の新京（満人街）

当時の新京（日本橋通り）

SEKIGUCHI